

子どもたちの「笑顔の架け橋」をつくりたい 企業と地域と施設をつなぐ



NPPO法人ブリッジフォースマイル 代表
林 恵子さん
聞き手 編集部

タイガーマスク運動で世間の注目が集まった児童養護施設。しかし、施設の子どもたちへの誤解はまだ多いのが実情でしょう。ワーキングマザーとして大手企業に勤めていた林恵子さんは2003年の冬、施設の子どもたちの現実を知り1年後にNPPOを設立。施設の子どもたちが社会に巣立つ支援をする活動に取り組んでいます。

このままで、いいのか！

— 児童養護施設を退所した子どもたちの自立支援をするNPPOを立ち上げられた経緯は？

林 出産後、改めて自分のキャリアを考え直し、MBA留学を決意。その準備の一環で参加した研修で児童養護施設を知りました。「企業が児童養護施設に対して行う支援プログラムを考える」のが課題でした。はじめは、「かわいそうな孤児に対して企業がどんな体験をさせてあげられるのか」と思っ

ていたのですが、調査を進める中で、それが思い上がりだと気づきました。実際に彼らが必要としているものももっと大きく、簡単には解決しないことだったのです。

私は親に大学まで行かせてもらえなかった。将来の選択肢もいろいろありましたが、それに比べ、彼らには後ろ盾もなく、教育や職も不十分なまま社会に送り出されてしまう。そこで適応できず、問題を起せば「大人として」法で裁かれる——それはおかしいのではないかと、と強い憤りを覚えたのです。見渡すと児童養護施設を退所した子どもたちを支える資源は、社会の中になくさんありました。でも、それらは

PROFILE ●はやし・けいこ●

1973年12月26日生まれ。津田塾大学卒業後、株式会社パナに入社。副社長秘書、営業、面接、契約管理、人事などを担当。二児を出産後、子育てと仕事を両立させながら、社会起業家になるためにMBA留学を計画。英語力を磨く目的で参加した研修で、児童養護施設と出会う。2004年12月、NPPOブリッジフォースマイル創設、05年6月法人成立。

バラバラに存在していて、施設には届いていない。それなら誰かが橋渡しをすればいいと考え、NPPO設立に思い至りました。「ブリッジフォースマイル」という名称は笑顔の架け橋となるという意味があるのです。

— 大手企業を辞めてまでNPPOを立ち上げるのは不安も大きかったのでは？

ブリッジフォースマイルの自立支援全体像

	中学生	高校生 巣立ちプロジェクト 出張セミナー ブリッジキャリア	退所者 アトモプロジェクト スマイリングプロジェクト カナエール
意欲	職業体験	職業体験 ココソサポート (ボランティアによる 個別支援)	自立ナビゲーション (ボランティアによる 個別支援) キャリア支援・進学支援
仲間		ランチ会 修了パーティ	交流イベント
能力 スキル		セミナー	
知識 情報	セミナー ハンドブック	セミナー ハンドブック	アトメル(情報配信)
生活 基盤		生活必需品の提供	住宅支援 就労支援 奨学金支援

せなイメージをもてるかどうかは、その子がどのようなロールモデルを見たかに大きく影響されます。一人でもよいので、先生や先輩、友達の中に「自分もこうなりたい」というモデルを見

つけられれば、意欲を持ちやすいと思えます。もう一つは、そこに至るまでのスキルや判断する力を高めることです。自分がどう行動し、どう問題を解決していくのか、主体的に選択できる

ようにすること
が大切だと考えて
います。

— 具体的な活動
内容を教えてく
ださい。

林 ブリッジ
フォースマイル
では、施設に
入っているとき
から退所後ま
で、子どもたち
の自立を支援す
る一通りのプロ
グラムをつくつ



林 留学に向けて貯金をしていたので、資金面での不安はあまりなかったです。ただ、児童養護の問題はたいへん根が深く、最初はどこまでやればいいのか不安がありました。児童虐待の背景には、親御さんの生活的な困窮とか、メンタル面の問題などがありますし、施設に入っても職員の数が足りないなどの問題がある。最終的には国の施策まで遡ることになります。そんな大きなことに、個人としてどこまでか

かわっていきけるのだろうと思うと、底なし沼にはまってしまうような怖さがありましたね。

—でも、飛び込むことができた。そこまで熱くなれたというのは、児童養護施設で見たインパクトが強かったのですか。

林 それもあるのですが、もともとMBA留学を目指したのも、社会の問題

を解決する仕事で起業したかったからなのです。でも、具体的に何をするのか見つかっていなかった。一方で子育てをしながら、社会問題にいつそう関心を持つようになり、「日本の将来は大丈夫だろうか」と思っていたので、児童養護施設の問題は、私を感じていた不安と通じるものがありました。

ブリッジフォースマイルの活動

—施設を出た子どもたちが「自立」というとき、何ををもって「自立」と考えるのですか？

林 私たちは「主体的に自らの幸せな人生を選択できること」としていますが、これには二つの部分があります。一つは、自分が幸せになったときのイメージを持つこと。もともと自己肯定感や意欲が低い子が多いのですが、幸

ています。子どもたちは18歳になると児童養護施設を退所し、自立して生きていくことを求められますが、大学進学率は全国平均の3分の1以下ですし、経済的理由などで中退する割合は4倍です。学歴が低いため就職の胃口が狭い上に、せっかく就職しても定着率が悪い傾向があります。ただでさえ心に傷を抱えている子が、18歳で自立して社会生活を送るのは想像している以上にたいへんなことなのです。

中学生・高校生を対象とした「キャリアプロジェクト」では、職業適性診断やカウンセリングをはじめ、実際にオフィス内で職業体験できるプログラムを用意しています。出かけるのを面倒がる子どもたちも多いので、サポートが施設に向かい自立に向けた意欲や関心を引き出す「出張セミナー」もあります。

高校3年生を対象とした「巣立ちプロジェクト」では、社会人ボランティア

アが退所後に役立つ知識・スキルや人的ネットワークづくりの方法をセミナー形式で教え、終了後にマンツーマンでの個別支援を行います。6回のセミナーすべてに参加した人には3万円相当の生活必需品をプレゼントしますが、これは企業や個人からの提供によるものです。

退所した子には、「アトモプロジェクト」があります。定期的に集まれる交流イベントを開催したり、社会人ボランティアがマンツーマンで悩みごとの相談にのったり、退所後に役立つ生活情報を定期的にメールで送ったりしています。

安価で安心して住める住居を提供する「スマイリングプロジェクト」では一軒家をシェアハウスにする試みなどが始まっています。

また、ボランティアの人には、複雑な背景を持つ子どもたちのことを理解し、適切なサポートが求められるので、



子どもたちの心理を学び、実践的なコミュニケーションスキルを向上させる研修を実施しています。

—普通の親子関係が築けない中で育った子どもたちとのコミュニケーションで難しいところはありますか？

林 こちらが少しでもネガティブな言い方をする、自分が否定されたような気持ちになってしまうのでしょうか。「もう、いい！」とすぐ関係を切ろうとしたら、「敵か見方か」に色分けし

と思っっているのです。

ボランティアをやりたい人はたくさんいますので、彼らが効率よく活躍できるような仕組みをつくれれば、より成果を挙げることができると思います。

カナエールの試み

林 昨日リリースしたばかりの「カナエール」という奨学金支援プログラムがあります。児童養護施設の大学等進学率は非常に低く、貧困の連鎖が進学率と大きくかわっているところがあります。この連鎖を断ち切り、進学希望者たちの夢を叶える力をはぐくむプログラムなのです。

日本では大学進学・卒業には何百万円もかかるので、進学の支援を受けにくく、しかも成果が見えにくいところがあります。その上、児童養護施設の子どもの場合は、プライバシーの

ようとしたりする傾向があります。NPOの場合は何の強制力もないので、相手から関係を切られてしまうと、なす術がありません。ですから、そのあたりの伝え方には気を使います。

—スタッフの中に心理職の方はいらっしゃるのですか？

林 臨床心理士や医師はいませんが、心理カウンセリングの勉強をしているスタッフもいますし、私たちの趣旨に賛同してくださる施設職員の方から助言をいただいたりしています。

私たちとしては、先入観を持たないよう、虐待の過去とか家庭の事情とか、あまり詳しいことまでは聞かないようにしています。そうした意味での「専門性がないこと」は私たちの強みでもあると考えています。彼らが接してきた施設職員の常識が世間の常識と一致しているわけではありませんし、世

問題などであまり顔を見せていないので、一般の人からは彼らが何に困難を感じているのかも見えにくい。

カナエールでは、保護するだけの発想から離れて、今度は支援者の前に顔を出して、「私たちのことを応援してください」と訴えるわけです。施設に入っている子どもたちに、先輩が成功のロールモデルを見せるという面もあります。

具体的には、今年の9月23日に「スピーチコンテスト」を開きます。17人の応募があり、その中から10人を書類選考して現在準備をしているところです。来場者たちは、頑張ろうとしている子どもたちの姿を見ることができ、その中から奨学金の出資者が出てくれたらいいなと思っています。月々2000円から継続寄付をしていただいて、卒業までをサポートしていただく。子どもには月々3万円を提供しようと思っっているのです、2000円が15

間に出ればいろいろな考え方をする人がいます。私たちのスタッフでも、心理やコミュニケーションについてよく勉強している人もいるし、子どもとのコミュニケーションが苦手な人もいます。いろいろな人間で構成されているスタッフとのコミュニケーションが、一般社会に出るときのトレーニングになっている面はあると思います。

NPOを始めたとき、施設関係者に「あなたは勉強が足りない」「児童養護施設に何か月か泊まりこむ経験をしなさい」と叱られたことがあります。でも、当時は子育てをしながらでしたので、その時間はありませんでしたし、私が目指しているのは仕組みをつくることであって、子どもたちにどう接するかは専門家ではない。専門性では私は経営学やマーケティングに関心があり、ニーズを聞き取って適切なプログラムをつくったり、ボランティアや企業につなげたりして、支えていきたい

口必要になります。15人で1人の子の進学をサポートしていく。一人ひとりの負担は小さいけれど、継続することで一人の子が大学進学・卒業を果たせるのです。施設の子どもたちだけでなく、東日本大震災で被災した子どもたちも対象にしています。

—スピーカーコンテストで奨学金が決まるのですか？

林 いいえ、発表者10人の奨学金はすでに用意してあるのです。ですから、どちらかという発表会です。スピーカーのプレゼンテーションをみて、優秀をつけ、上位の子にはプレゼントをあげようということですよ。

夢をかなえた、一人の女の子の物語

看護師になりたかった夢をかなえ、笑顔で働く23歳のハルカ。彼女は実の親に育ててもらえず、18歳まで岩手県にある児童養護施設で生活していた。看護学校の学費や生活費の支払いが困難なハルカを支え続けたのは、彼女が育った児童養護施設の職員をはじめとする有志たち30人。「ハルカの夢をかなえる奨学金」として、看護学校を卒業するまでの3年間、彼女に送金を続けた。だから、今のハルカがいる。くじけそうになっても、毎月届く30人のエールに励まされてきた。**【私一人じゃ、かなえられなかった。今度は私が後輩を応援する番】**これは、30人の大人たちが、子どもの夢見る力を支え、育て、次の子どもにも夢のバトンが渡されようとしている、とても素敵な物語。私たちは、彼女の実話をヒントに、「挑戦する子どもたち×応援する大人たち」の「想いをつなぐプラットフォーム」を、本気で創ることにしました。それが「カナエール」。

挑戦できるという希望を、すべての子どもたちへ。
夢がかなう連鎖の社会が生まれます。

カナエール概要

- カナエールとは** 東日本大震災被災者、児童養護施設退所者などが、夢をかなえるチカラをはぐむための、教育支援プロジェクト
- 特徴** ①複数の個人・企業、イベントで若者を卒業まで継続的にサポート
②イベント、ブログ等を通じた、若者・支援者双方の顔が見える場の提供
③児童養護施設入居者など次の世代へのロールモデルの提供
- 支援内容** 進学・就学を希望する若者に、2つの側面から支援
①資金：一時金30万円、卒業まで毎月3万円の奨学金
②意欲：ボランティアや支援者のコミュニティ、専門家によるサポート
- お願いしたいこと** 多くの方、企業に、継続的なサポートをお願いしています
①奨学金の月々寄付 ②支援対象者とのコミュニケーション

「カナエール」資料より

「叶える」という文字は口にと書きませんが、人前で話すことで夢の実現の可能性は上がってくると思うのです。自分の夢をボランティアと一緒に考えてスピーチの準備をして、250人の聴衆の前で発表するという体験自体が子どもたちにとって大きな体験になると思っています。

「話がうまい子のほうが得をするのか」との批判はあるかもしれませんが、それは承知しています。でも、人間は頑張ろうという人を応援したいと思えますよね。努力していない人に働きかけるのは、ものすごいエネルギーがいりますけれど、頑張ろうと思っている人を支えるのはすごくやりがいがあるし、成果も出やすい。子どもたちには「自分が努力することで応援者が出てくる」という体験をしてもらいたいです。それが今後生きていく上で大切なスキルになると思いますから。支援する人たちも、子ども話を聞く、

守ってあげるといっただけでなく、自分の力でチャレンジするのを支えることがいかに大切に気づいてほしいと思います。

「新しい公共」

—NPOも含めた「新しい公共」という考え方がありますが、これについてはどう思われますか。

林 行政には期待する一方で、公平性や安定性を強く求められるため、どうしても機動力が落ちてしまいます。その点、民間はもつと自由で、たとえ失敗しても許されますから、身動きが取りやすいのです。私たちのようなNPOが試行錯誤をしながらどんどん出て行ってほしいと思います。

児童養護施設から巣立つ若者の支援は、また私たちだけの取り組みですが、

私は独占がいいとは思っていません。間口を広く浅くとした巣立ちのプログラム、間口は狭いけれど高度な仕事につながるプログラムなど、いろいろなバリエーションがあつていいと思います。今の段階では、私たちのプログラムを利用するかしないかの二者択一しかありませんが、さまざまなNPOが独自のプログラムを用意し、利用者にはクーポン券を配って自由に選べるような仕組みであれば理想的ですね。「新しい公共」もそうやって育っていくのかなと思います。

NPO法人ブリッジ
フォースマイル

<http://www.b4s.jp/>

●編集部から●

小さいころは警察官に憧れたことも。3月11日以降、震災の報道を見ては涙を流しているとのこと。正義感が強く、共感しやすい林さん。素敵な笑顔と前向きなエネルギーに「新しい公共」の理想形を見ました。